

九たび歌よみに与ふる書

正岡子規

連載第九回

一つ一つ論じるのも面倒なので、あと数首を挙げておいて『金槐集』以外の歌に移りましょう。

山は裂け海はあせなん世なりとも君にふた心われあらめやも

箱根路をわが越え来れば伊豆の海やおきの小島に波のよる見ゆ

世の中はつねにもがもななぎさ漕ぐ海人の小舟の網手かなしも

大海のいそもとどろによする波われてくだけてさけて散るかも

箱根路の歌は極めて面白いのですが、この想いは古今に通じている想いなので、実朝がこれを作ったと言つて驚くにはあたりません。ただ、「世の中は」の歌のよ

これも客観的歌で、景色も寂しく趣深いところへ、語を畳みかけて調子を取っているところは、たいへんめずらしいものです。

さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵を並べん冬の山里 (西行)

西行の心はこの歌に現れています。「心なき身にも哀れは知られけり」などという露骨な歌が世にもてはやされて、この歌などはかえって知る人も少ないのは、残念なことです。「庵を並べん」というようなところの斬新にして風情ある趣は、西行でなくては表現することので

うに、古えからの調子の方が、万葉集以後において、しかも華麗さを競い合っていた新古今集の時代において作られたという技量には、驚かざるを得ません。このように実朝の造詣の深いことは、いままら申し上げるのも愚かに感じられるほどです。「大海の」の歌は、実朝が創始した表現法でありましょう。

では、新古今集に移って、何首か挙げましょう。

なごの海の霞のまよりながむれば入日を洗ふ沖つ白波 (実定)

この歌のように客観的に景色をよく写しているものは、新古今集以前にはないものですが、この歌もこの集の特色として見ることが出来るものでしょう。惜しむらくは、「霞のまより」という句が疵になっています。「一面にたなびきたる霞」に「間」というのも変で、たとえ間があるとしても、それはこの趣向には必要ではありません。入日も海も霞ながらに見えることにこそ趣きがあるというべきでしょう。

ほのぼのと有明の月の月影に紅葉吹きおろす山おろしの風 (信明)

閨の上にかたえさしおほひ外面なる葉広柏に霰ふるなり (能因)

これも客観的歌です。上三句が複雑な趣を表そうとしてやや混雑に陥っていますが、葉広柏に霰のはじく趣は極めて面白いものです。

岡の辺の里のあるじを尋ねれば人は答へず山おろしの風 (慈円)

趣が深く句法もしっかりしています。この種の歌の第四句「答へて」などといって、下に連続する句法となしてしまつと、何の面白みもなくなってしまいます。

ささ波や比良山風の海吹けば釣する蛸の袖かへる見ゆ (読み人知らず)

実景をそのままに写し、いささかも技巧を弄ばないところは、かえって趣が深くなっています。

神風や玉串の葉をとりかざし内外の宮に君をこそ祈れ (俊恵)



正岡子規

きないもので、特に「冬の」と言葉を置いたのも、尋常な歌読みの方
法とはちがいます。後
年、芭蕉が新たに俳諧
を興したのも、寂は「庵
を並べん」などから悟
りを得、季の結び方は
「冬の山里」などより
思いついたのではない
かと思われれます。

神祇の歌といえ、千代の八千代のと定文句を並べるところは、逆になかなか神の御心に適っているように思われます。句がしまっているところ、半ば客観的に叙しているところなど、注意すべきで、神風の五文字も簡単なようでありながら極めてよく響いています。

阿耨多羅三藐三菩提の仏たちわが立つ袖に冥加あら
せたまへ
(伝教)

たいへんめでたい歌です。長句の用い方などそれまでになく、これを詠んだ人もさすがですが、この歌を勅撰

短歌季評

これまで現代の日本の代表的な短歌誌、大手新聞社の歌壇を概観してきたが、全体として痛感するのは、短歌のあまりにもひどい劣化である。少しいい、まだましと思えるのは、たいてい一時代前の大家や功績を残した人で、苦し紛れにそれらの優れた短歌を引っ張ってきて載せて、かろうじて伝統短歌の重みを滲ませて、体面を取り繕っているにすぎない。この劣化と貧困化は、よく考えてみるとゆゆ

のを報道しなくなっているし、テレビもお笑い芸人を前に出した空虚な笑いを虚しく溢れさせていて、時間を汚している。コマージュの質も急激に幼稚化して、斬新な発想も見られない。日曜大河ドラマも脚本家の劣化と、題材のマンネリ化で、見るに値しなくなっている。それらと並行するように、日本のGNPも下降の一途で、もはや世界から日本よりもはるかに中国や韓国や台湾の方が上に見られるようになっていいる。経済と文化は別だと見たい気持ちはあるけれども、こういう結果としての現状を冷静に受け止められずにはいられない。真の力をなくした言葉から何が生まれるのか、腐蝕と衰退しか生まれまいだろう。生活や生きること、生きていることをそのようにしか捉えられないのなら、そのようなものしか生まれてこないのは当然のことである。言葉が腐れば文化も腐るという自論を繰り返さずにはいられない。

朝日歌壇九月一日の短歌を見てみると、永田和宏の選でひさびさに見る妹の左利き実家売る書類に署名するとき「楽しみを老後にとっておいたバカ」バカな私を今は楽しんで

の二首が秀歌として☆印が付けられているが、「ひさびさに」の歌は感動の対象が、実家を売るといふことよりも、妹としばらく会っていない、左利きにあらためて気づくことに向けられていることに、矮小性を感じないではいられない。

集に加えた人もその勇気を褒めたたえるべきです。第二句十字の長句でありながら成語であるのでそれほど言うにくくなく、第五句九字にしたのはことに変わっているものではないものの、九字にする必要と言うものが感じられません。もし七字などで止めてしまつては、上の十字句にたいして釣り合いが取れなくなります。初めの方に字余りの句があるがために、後ろの方にも字余りの句を置かなければならない場合はしばしばあるものです。もし字余りの句は一句でも少ないのがよいなどという人がいれば、その人は字余りの趣きを解せないと言うべきでしょう。

(明治三十一年三月三日)
(現代語訳／五十嵐勉)

五十嵐 勉

しきことで、文化全体の衰微と無力化に繋がっていくのだが、だれもそれに警鐘を鳴らしたり、危機感を訴えたりする者がいない。文化の根が腐り始めていることを実感する。感受性そのものが鈍り、何が命にとって大事で、どういう感情を大切に、どう次に生み出す力に繋げていけばいいのか、その回路を喪失している。今日いたるところに、その腐植と劣化が表出している。新聞は真に問題とすべきも

い。この作者は家を失うことにどうしてもっと大きな喪失を感じないのか、何か致命的なものが欠けているのではなにかと思ってしまう。そしてそれをおもしろい歌として取り上げる選者の眼にも見るべきものを見ずに表面的なおかしさだけを捉える貧困を感じる。「楽しみを」の歌も、俗言に振り回される愚かしさをただ自虐的に述べているにすぎない浅い内容を、選者もおもしろがってしまっているバカバカしさに空いた口が塞がらない。

他の選者馬場あき子、佐佐木幸綱、高野公彦も同じである。同じ歌、似たり寄つたりの歌を選んでいる。

熊に遭う危険冒したネマガリダケ七百円で買う道の駅
この歌も、実際に熊に遭つたわけでもない取るに足らない冒険を数字を入れて自嘲しているだけで、他愛もない中身には二束三文の値打もない。

日本人これが好きねと「コンドルは飛んでいく」ばかり
吹くペルー人

珍しいペルー人との共通のものが得られたことをただ伝えていただけの何の感興の深まりもない歌である。

☆印が付いている歌はこんな歌ばかり。一つ一つ挙げていくにはスペースがなく虚しいので、あとは省略するが、天の朝日がこんな歌ばかりを出している、よく恥ずかしくないと思う。日本の伝統歌を汚している。

今回はなぜこういうことになるのか、探ってみよう。